



ふるさとを  
たずねて

伊予鉄郡中線

松前町文化財保護審議委員

郷田 光生

「岡田の薫風によれば、松山市より郡中町に至る伊予鉄道郡中線の中間に出合停車場あり、出合駅は重信河畔、堤防の南方に位置せるが明治43年7月新停車場の改築と共に南方約三町、昌農内の東部に移転せり、南は松前駅に出で、北余土村に通ず、半時を出でずして松山市、地蔵町、郡中町に達す」と記されている。

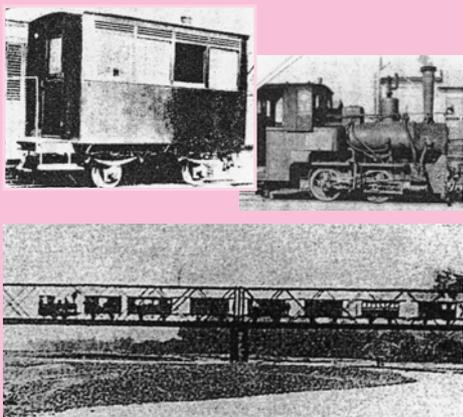
今の伊予鉄道郡中線は、最初伊予鉄道という名称だった。郡中線は、重信川に鉄橋を造る難工事のため横河原線より遅れ、明治29年7月に松山市藤原（現在の松山市駅付近）から郡中間が開通した。町内に設置された駅は、出合と松

前で、その後、明治43年7月に岡田駅が完成し、出合駅は貨物専用駅となった。列車は、機関車と客車の間に貨物を連結し、開通当初の運転回数は1日に12回で、所要時間は40分だった。明治33年、伊予鉄道・道後鉄道・南予鉄道の3者が合併し、伊予鉄道電気株式会社として発足した。

現在の松山市駅を外側駅と呼んでいたが、明治35年に外側駅は松山駅と改称され、さらに昭和2年

国鉄（現在のJR）の松山開通に当たって、松山駅の名称を国鉄にゆずり、松山市駅と改称された。

大正・昭和の初めごろより、通勤・通学列車となり、朝の列車は超満員で、デッキにまで人が鈴なりとなった。昭和12年7月、軌間の拡幅工事を行い、国鉄並の軌間になった。14年には国鉄南郡中駅（現在の伊予市駅）に接続するため郡中港まで延長、さらに25年には郡中線の電化工事が完成し、同時に30分間隔の運転、次いで20分間隔、現在では15分間隔運転となった。そして42年には、古泉駅が新設された。



重信川の出合鉄橋を渡る坊っちゃん列車

ふるさと歴史散歩④

藩境巡りⅡ

(松前史談会レポート)

先月号では、松前町と伊予市の境と藩政時代の松山藩と大洲藩の境がどう異なっているかを説明しました。

今回は、南黒田と鶴吉の賀佐が大洲藩に属していた経緯を説明します。

寛永11年(1634)、時の松山藩主蒲生忠知の急死により蒲生家が断絶し、その後11ヵ月間、大洲藩主加藤泰興が城在番として松山城の警護にあたることになりました。そして、寛永12年(1635)7月に松平定行が松山藩主として入国するまでの間に、大洲藩は幕府に替地を申請して認められ、大洲藩の飛地であった風早郡・桑村郡57村と松山藩の伊予郡・浮穴郡の37村が交換されました。替地の条件(計算の根拠)は、石高です。石高を合わせる為に、黒田村と釣吉村が村分け(分割)され、南黒田と賀佐が大洲藩領になったのです。松山藩から大洲藩へは、13,472石、大洲藩から松山藩へは、13,578石を移すという決定でした。(松前町誌199ページ参照)

境界の変更は、そこに住む領民に長年の生活慣行基盤の改変という大きな問題をもたらし、やがて多くの紛争を引き起こすこととなります。水利をめぐる争い(水論)、入会山紛争(山論)、漁業権をめぐる争い(網代騒動)がその代表です。

藩境沿線の史蹟・文化財について見てみましょう。以下に列举しますので、どのくらいご存知かこの機会に確かめてみてはいかがでしょうか。大洲街道藩境の碑・延命地藏尊(北黒田) 鷺野南村塾 橙黄園・朝日天神社(南黒田) 天長寺(横田) 伊予神社(神崎) 藩境の石(鶴吉) 恵依弥二名神社・出作遺跡(出作) 高忍日売神社(徳丸) などです。

これらの写真や詳しい説明は、町や松前史談会のホームページを通じて、世界中で見ることができます。

1月のふるさと歴史散歩は、休みます。

問い合わせ 松前史談会(鷺野) ☎984-5439



▲藩境一松前町の東端一松前町徳丸・砥部町八倉と伊予市八倉の接点の水路



▲藩境の碑「従是南大洲領」 県道22号の地蔵町と下吾川の境界